

[テーマ企画：特集 他動性]

まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、これまでの「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイス」「所有・存在表現」に続き、今回は「他動性」という統一テーマを組んで、各言語における他動性の状況を報告していただくということになった。

まず、日本語による 20 の例文（実際には a, b. などに分かれているので実際には 49 の例文）からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、本稿稿末のアンケート本体も参照されたい。

こうして 23 の言語に関する所有・存在表現のデータが集まった。これは外大にある 27 専攻語のうちの 15 言語にウズベク語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、ニブフ語、ブルガリア語、マダガスカル語、リトアニア語を加えたものとなっている。

これらの言語を語族別に見ると、まずイタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、リトアニア語、ポーランド語、ロシア語、ブルガリア語、ペルシア語、ウルドゥー語はインド・ヨーロッパ語族の言語である。ソロン語、ナーナイ語はツングース諸語、ダグール語、モンゴル語はモンゴル諸語、ウズベク語はチュルク諸語に属するが、これらは（系統ではなく）構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。アラビア語はアフロ・アジア語族の言語である。マレーシア語、マダガスカル語はオーストロネシア語族、ラオ語はタイ・カダイ語族、中国語は（異論もあるが）シナ・チベット語族、とされている。ニブフ語、朝鮮語、日本語は系統的に孤立した言語とされている。ただ、複数の語族のデータからなるものの、アフリカやオーストラリア、ニューギニア、カフカース、新大陸の諸言語のデータを欠いているため、本稿での以下に展開される類型論的考察はきわめて不十分なものであることは否めない。メジャーな言語でもチベット・ビルマ諸語やゲルマン語派の言語など、格が多く、重要な言語のデータが得られていないことは誠に残念である。

2. 先行研究

角田 (1991, 改訂版は 2009, なお元の論文は Tsunoda 1981, 1985, 本稿では主に最新の知見が加えられた 2009 を参考にした) は下記のような二項述語階層を提案し, ①表の左の方ほど動作的で右の方ほど状态的, ②左の方ほど対象に影響の及ぶ度合いが大きい, ③左の方ほど品詞は動詞で現れやすく右の方ほど形容詞その他で現れやすい, としている.

角田 (2009) がこのような階層を立てた根拠は諸言語における格枠組みであり, 基本的に主格対格構造の言語であれば [主格-対格], 能格絶対格構造の言語であれば [能格-絶対格] のような, もっとも他動詞らしい格枠組みが現れる動詞をより左に配置し, 他動詞らしい格枠組みが現れなくなるとつれて右に配置するようにすることによって, この階層を設定したものとしている.

二項述語階層(角田 1991)

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す 壊す 温める	叩く 蹴る ぶつかる	see hear 見つける	look listen	待つ 捜す	知る わかる 覚える 忘れる	愛す 惚れる 好き 嫌い 欲しい 要る 怒る 恐れる	持つ ある 似る 欠ける 成る 含む 対応 する	できる 得意 強い 苦手 good capable proficient

しかし, 当然のことながら 6,000 もある世界の言語の格枠組みについての十分な検討を経て設定されたものではない. 角田 (2009) が主に参考にしたのは, 日本語, 英語, バスク語, チベット語, アバル語, サモア語, ジャル語, ワルゴ語である.

これに対し, Malchukov (2005) は, 一項述語となるものへの連続も視野に入れ, より多くの言語の格枠組みを検討して上で, 次のような二次元的な階層を提案した.

2	Ile “follow”, <u>IIf “help”</u> , IV “happen”
1	<u>IIId “look for”</u> , <u>IIg “speak to”</u> , <u>IIc “can”</u> , IIIId “try”

(下線太字の動詞は今回の調査でも扱っているもの)

1. 非規準的にマークされるA/Sを要求する述語を持っていれば、その言語は同様に、非規準的にマークされるA/S, Oを要求するClass I a-b, Class II a-c, Class IIIa-b, Class Vの述語をも持つ。
2. Class IIIaとClass I bは共起する。
3. もし非規準的にマークされる A/S を要求する Class IIIa/ I b をもつ言語は、同様に、非規準的にマークされる A/S を要求する Class I a をも持つ。

今回、Onishi (2001) を読んだのは調査終了後であったため、今回の調査結果はOnishi (2001) の扱った動詞を全てカバーするものとはなっていないが、多くの動詞が重なっている。しかしOnishi (2001) の一般化を検証するまでには至らなかったため、この点は今後の課題としたい。

目的語に対する多様な標示 (differential object marking) に関する近年の類型論的研究では、目的語の標示がそれ自身のもつ性質によって決定されるタイプに加え、主語と目的語の関係によって決定されるタイプのあることが報告されており、前者のような要因は “local” 「局所的」、後者のような要因は “global” と呼ばれている (Malchukov and de Swart 2009: 348)。この問題に関しては、3.5.3. で問題にする。

今回のアンケートは、上記のような状況を踏まえて、より多くの言語でのデータを集めることによって二項述語階層の妥当性を検討しようとするものである。

3. アンケート結果の検討と分析

3.0. 分析の枠組み

Malchukov (2005) を参考にし、角田 (2009) の7分類 (下位分類を入れると9分類) に「移動」、「社会行為」、「言語行動」、「相互」、「感覚」を加えた。さらに自身の判断で「作成」を加えた。

角田 (2009) の感情、関係、能力、には多様なものが含まれていると考えられるので、「感情」を「好悪の感情」、「必要の感情」、「喜怒哀楽の感情 (実際に扱ったのは怒りと恐れ)」の3つに、「関係」を「類似の関係」と「包含の関係」と「変化の関係」の3つに、「能力」を「能力」と「上手/下手」の2つに分けた。

こうして得られた例文データを基に、まず、その言語の他動詞文において最もデフォルトな構造（以下では「**典型構造**」(canonical structure)と呼ぶ)をとるか否かに注目して、これを点数化することにした。したがって、多くの言語では、(他動詞+) [主格-対格] 構造をとるか否かに注目し、[主格-対格] 構造であれば2点、そうでなければ、0点とした。格のない言語の場合、主語・目的語とみなせるものの組み合わせで現れれば2点、目的語でなく、前置詞等を伴った形で名詞項が現れれば0点とした。1つの調査例文に2つの格枠組みが観察され、そのうちの1つが典型構造、もう一つは非典型構造である場合には1点とした。3つ以上の構文が観察される場合でも、その中に典型構造と非典型構造の両方が含まれていれば、やはり1点としてカウントした。

単純過去や完了では能格構造になるウルドゥー語の場合には、[能格-絶対格] 構造をデフォルトの文とみなし、これが現れれば2点、そうでなければ0点、他方、[絶対格-斜格] 構造がデフォルトの文でこれが現れれば2点、そうでなければ0点、とした。

動作主態と被動者態のどちらも一次的であり、多くの場合に両方が成立するマダガスカル語の場合には、動作主態と被動者態の両方をデフォルトと考えることにした。またマダガスカル語の属格は典型構造の要素とみなすことにした。したがって前置詞が現れない限り、基本的に典型構造とみなすこととした。

欧米の言語に主に見られる補文節 (complement clause) は目的語とみなし、典型的な構造としてカウントした。

[斜格-対格] という構造の文は一般に珍しいため、基本的に目的語と思われる名詞項がデフォルトの形であるか否か、という点に着目した定量的分析となっている。階層のより右の方では、多くの言語で斜格主語も現れるようになる。この点もさらに数値化し、目的語のデータと合わせて判断することが必要であり、これも今後の課題である。

ソロン語、ナーナイ語、ダグール語、モンゴル語において、不定対格 (モンゴル語などではいわゆるゼロ形も含む)、指定格、再帰人称 (ダグール語では3人称も) がついた形式は、対格相当としてカウントした。この問題については3.5.3で後述する。

なおアストゥリアス語については扱わなかった。ダグール語はチチハル方言、モンゴル語はハルハ方言を基にデータを作成した。

3.1. 調査結果

表 1: 調査結果

	直接 変化	直接 不変	作成	知 覚 2A	知 覚 2B	追及	知識	感情 1 好悪	感情 2 需要
	1abc	2abcd	4b	3ac4a	3bd	5abc	6abc7ab	8abc	9ab
総点	6	8	2	6	4	6	10	6	4
アラビア	6	6	2	5	0	4	9	6	2
イタリア	6	3	2	6	4	6	9	4	2
ウズベク	6	4	2	4	4	6	8	6	2
ウルドゥー	6	0	2	?(0)	4	0	2	0	0
スペイン	6	1	2	4	4	5	10	3	4
ポルトガル	6	1	2	6	2	4	7	3	2
ソロン	6	8	2	6	4	6	10	4	2
ダグール	6	8	2	2	4	6	10	6	4
ナーナイ	6	6	1	6	4	6	10	6	3
フランス	6	4	2	6	4	6	8	4	0
ブルガリア	6	6	2	6	4	6	10	6	2
ペルシア	6	2	2	5	4	2	8	2	2
ポーランド	6	8	2	6	2	2	8	4	3
ロシア	6	4	2	4	4	6	10	4	0
マダガスカ	6	8	2	6	4	6	10	6	4
マレーシア	6	8	2	4	4	6	7	4	2
モンゴル	6	6	2	2	4	6	10	2	2
ラオ	6	8	2	2	4	6	10	6	4
リトニア	6	2	2	6	1	0	9	3	0
中国	6	7	2	2	4	6	10	6	4
朝鮮	6	4	2	2	4	6	9	4	2
ニブフ	6	6	2	6	4	6	10	6	4
日本	6	4	2	2	4	6	8	2	0
合計	138	114	45	98	81	113	202	97	50
%	100	62	98	71	88.0	82	87.8	70	54

[テーマ企画：特集 他動性]
まえがき

感情 3	社会 行為	言語 行動	相互	関係 1	関係 2	能力 1	能力 2	移動	感覚 1	感覚 2	合計
10ab	18ab	19ab	20	11ab	12b	13ab	14ab	15abc	16ab	17ab	
4	4	4	2	4	2	4	4	6	4	4	94
1	4	4	2	2	2	4	2	2	0	0	65
0	4	0	1	1	0	4	0	3	4	4	59
0	0	4	1	0	0	1	1	0	0	0	49
0	0	4	0	0	0	4	0	2	0	0	24
0	4	3	2	2	0	4	0	2	4	4	64
1	4	4	1	4	0	4	0	2	4	2	59
0	4	4	2	0	0	0	0	2	0	0	60
0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	50
0	4	0	2	0	0	0	0	2	0	0	56
0	4	4	2	2	0	4	0	4	4	4	68
0	2	2	1	2	0	4	0	2	0	0	61
0	2	4	2	0	0	4	2	0	0	0	47
2	2	2	1	2	0	4	0	2	0	0	56
0	2	0	2	2	0	4	0	2	0	0	52
2	4	4	1	1	2	4	0	4	0	0	74
3	4	2	1	4	2	2	2	4	0	0	67
0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	44
4	4	4	1	4	2	0	0	6	0	0	73
0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	37
2	4	4	2	2	2	4	4	4	0	0	75
1	4	4	0	4	0	4	0	4	0	0	60
2	2	4	2	2	2	4	0	3	2	0	73
2	2	4	0	2	0	0	0	4	2	0	56
20	60	63	28	36	12	63	15	56	20	14	
22	65	68.4	61	39	26	68.4	16	41	22	15	

3.2. 階層別の分析と検討

各階層での 23 言語の点数を合計し、これを全言語が満点であった場合の数値で割り、パーセンテージを比較した。すなわちこのパーセンテージが高いほど、デフォルトの格枠組みで表現されているということになり、すなわち他動性が高いということになる。

直接変化 (100) > 作成 (98) > 知識 (87.8) > 追及 (82) > 能動知覚 (81) >
受動知覚 (71) > 好悪 (70) > 言語行動 (68.4) = 能力 (68.4) >
社会行為 (65) > 直接不変化 (62) > 相互 (61) > 需要感情 (54) >
移動 (41) > 類似・包含 関係 (36) > 変転関係 (26) >
怒り・恐れ (22) = 飲食欲求 (22) > 寒さ (15) = 上手下手 (15)

この結果を角田 (2009) および Malchukov (2005) の階層と比べてみると以下のようである。

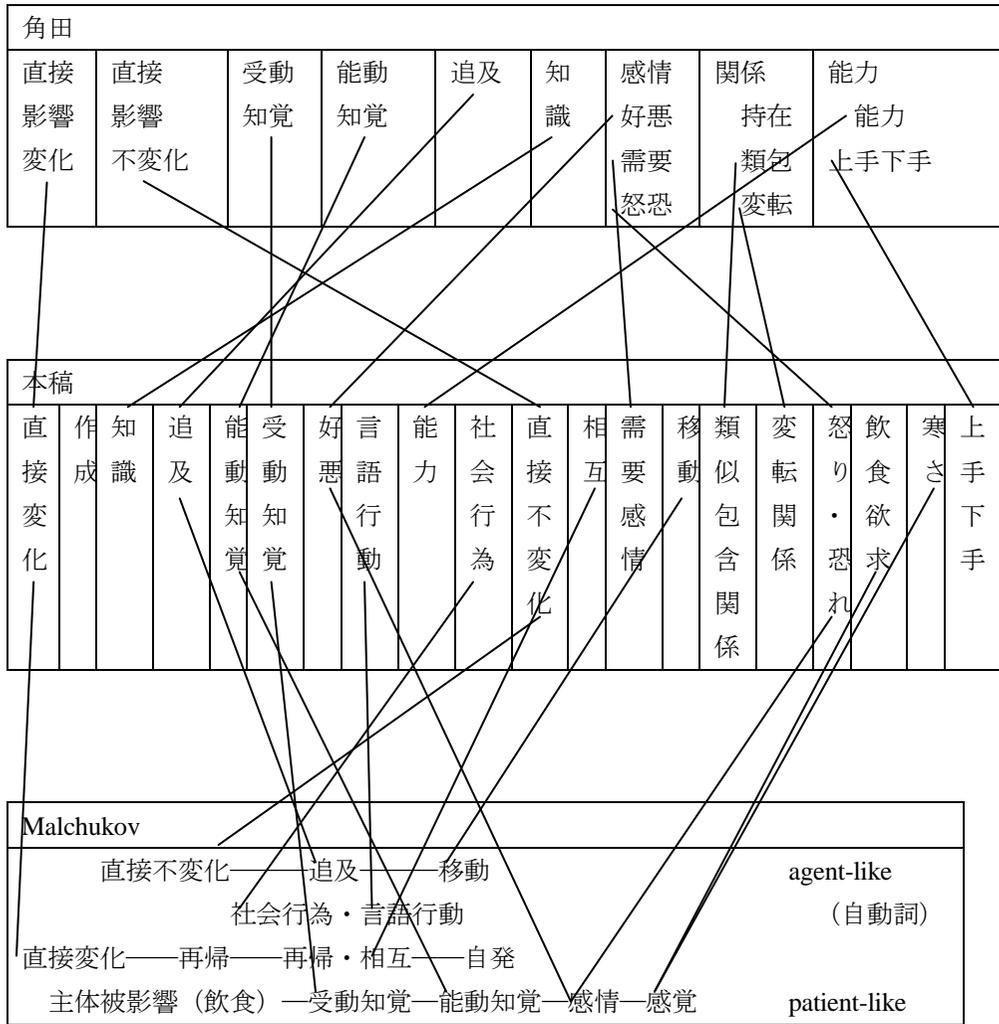


図 1: 先行研究との対比

角田 (2009) や Malchukov (2005) の結果と比べると, 次のような顕著な違いがあることが明らかになった.

- ・直接影響不変化の他動性は低い.
- ・能動知覚 (角田 (2009) の知覚 2B, Malchukov (2005) の cognition) は受動知覚 (角

田 (2009) の知覚 2A, Malchukov (2005) の preception) より他動性が高い。

・感情は、そのコントロールの度合いによって、その内部が大きく分かれる。

移動, 感覚を典型構造で標示する言語も少数ながら存在する。したがって, 通言語的には, 他動性は自動詞他動詞の境界を越えて考察すべきものとする。言い換えれば, 通言語的に見れば, 他動詞的な事態と自動詞的な事態は連続しているものとみるべきであろう。

3.3. 言語別の結果とその通言語的考察

言語別の合計点により, 23 言語をその点数の高い順に並べると以下のような結果が得られた。

中国(75)>マダガスカル(74)>ニブフ(73)=ラオ(73)>フランス(68)>マレーシア(67)>
アラビア(65)>スペイン(64)>ブルガリア(61)>朝鮮(60)>ソロン(60)>
ポルトガル(59)=イタリア(59)>ポーランド(56)=ナーナイ(56)=日本(56)>
ロシア(52)>ダグール(50)>ウズベク(49)>ペルシア(47)>モンゴル(44)>
リトアニア(37)>ウルドゥー(24)

点数の高い言語は他動詞的な格枠組みもしくは構文を好む言語であり (以下では便宜的に「他動的な」言語と呼ぶ), 点数の低い言語は斜格などを好む言語ということができる。

この結果は他の類型論的な特徴や地理的分布とある程度相関関係を持っていることが窺われる。

もっとも「他動的な」言語は, 中国語を含む東南アジアの言語に多く (マダガスカル語は地理的には遠いが, オーストロネシア語族の言語である), 格をはじめとする名詞の変化を持たない SVO 固定語順の孤立型言語である。次に「他動的な」傾向が強い言語は, ロマンズ諸語で, やはり印欧語の中にあっては格変化を失った SVO 固定語順の言語である。SOV 語順だが, S と O に標示を持たない点ではやや孤立的な類型を示すニブフ語も「他動的」である。

以下に続くのはスラブ諸語とアルタイ諸言語であるが, いずれも斜格を含む豊かな格変化を持っている一方 (ブルガリア語を除く), 語順はある程度自由である。アルタイ諸言語は表 1 の左から感情 3 までと相互には対格を用いるが, 社会行為, 言語活動

から関係、能力などには[主格-対格]の格枠組みをほとんど全く用いなくなる点で特徴的である。

もっとも「他動的」でないのは、印欧語の中でもインド・イラン語派のペルシア語、ウルドゥー語と、バルト語派のリトアニア語である。これらの言語もやはり豊かな格体系を持つが、ペルシア語とウルドゥー語では受動構文や与格構文等、他の言語において主格で現れる項を斜格で示す傾向を強く持っている。リトアニア語では、他動性の低い述語や、具体的でない対象に対して、対格を用いない強い傾向を示している。

このように二項述語階層からみた諸言語の「他動」的性格が、その言語の類型や地域と相関関係を持っていることは注目に値する。

3.4. 個々の階層に関する考察

この節では本稿で扱った20の階層について、3.2. で示した今回の分析結果の他動性の順序に従って、他動性の高かった方から順に考察を加えて行くことにする。

3.4.1. 直接影響変化

もっとも大きな問題と思われるのは、東南アジア大陸部孤立型言語であるラオ語および中国語の表現であろう。今回の集計・分析ではどちらも他動詞による表現として解釈したが、厳密にはそうでなく、[他動詞-名詞-自動詞]といった構造で表現され、真ん中の名詞は先行する他動詞の目的語と後続する自動詞の主語を兼ねている(中国語学で言うところのいわゆる兼語文)。

DeLancy (1985) は、他動詞的事態に、"Act of volition → Action → Event" という連鎖モデルを仮定している。英語や日本語など多くの言語の他動詞では、この連鎖全体が他動詞によって意味されるが、東南アジア大陸部孤立型言語では、どうもこの連鎖のうちの前半が他動詞によって示され、後半が自動詞によって示されて、連鎖全体はこうした他動詞と自動詞の組み合わせによってしばしば表現されるものようである。

峰岸 (2007) は、まさにこのタイプのこうした性格を描き出している。角田 (2009) はこの「1A 直接影響変化」を、もっとも他動詞らしい他動詞とするのであるが、それは英語や日本語からみての話であり、このような東南アジア大陸部孤立型言語からみれば、1A は他動詞で表現される諸表現のさらに左に位置して、もはや他動詞のみでは表現できない、いわば「超」他動詞とでもいうべきものである。他動詞と自動詞の組み合わせによる表現が必要と言う点を重視すれば、もはや他動性の軸からははずれ

るものとみるべきかもしれない。

ただこうした東南アジア大陸部孤立型言語の、いわば意志動詞と結果動詞の2つのグループは、他の多くの言語における他動詞自動詞の別とは重ならないものかもしれない。

このグループに関しては、今後、西アフリカをはじめとする世界の他の地域における動詞連続を持つ孤立型言語においてこの1Aがどのように表現されるか、に注目する必要があると考える。

3.4.2. 作成

作成に関し、典型構造をとらない文が観察されたのはナーナイ語のみである。これは指定格によるもので、これについては風間 (1999) も参照されたい。「作る」など作成関連の動作を行う際には、その動作対象はまだ存在していないわけであり、その対象は Hopper and Thompson (1980) のいう O individuation に関して、O non-individuated ということになるものと考えられる。今回調査した言語では、このことが問題になりそうな言語として、アルタイ諸言語、ペルシア語、ウルドゥー語が考えられる。このうちウズベク語、ペルシア語では定対格は任意、モンゴル語、ソロン語では不定を示す格無し形式となっているが、ウルドゥー語では絶対格、ダグール語では再帰人称形となっている。これらは今回典型構造としてカウントしたが、今後さらに研究する余地があるものとする。

3.4.3. 知識

知識に関しては、理解・識別・記憶、などの意味を問わず、どの言語でもほぼ典型構造によって表現され、高い他動性を示すことがわかった。この中で唯一圧倒的に低い他動性を示すのはウルドゥー語で (2/10)、「知る・識る」では絶-項無し、絶-与、「分かる」は与-絶、「覚える」では与 [自動詞]、「忘れる」では斜-絶、と典型構文がほとんど表れない。

3.4.4. 追及

追及でも多くの言語で典型構造が現れ、他動性は高い。しかしウルドゥー語とリトアニア語での値は0である。ウルドゥー語では「バスの待ちする」「財布の探索する」のような表現で、動作名詞+軽動詞の構造が用いられ、バスや財布と言った対象は属格をとってむしろこの動作名詞と結びついている。ペルシア語 (2点) でもエザーフ

エによってやはり動作名詞と結びついていることが観察され、両言語は類似を示している（以下ではこのタイプの構文を動作名詞構文と呼ぶことにする）。リトアニア語は文法的にも否定や不定量で典型構造を離れるが、語彙的に追及の動詞においても主属の構文となる。これは追及の対象は、動作の最中にはまだ定のものとして存在してはいないからではないかと考える。

3.4.5. 能動知覚と受動知覚

角田 (2009) は知覚を 2A と 2B に分けている。それをここでは能動知覚と受動知覚と呼んだが、これは角田 (2009) の意図とは異なるかもしれない。角田 (2009: 103) は英語で「See は対象の映像を既に捉えてしまった状態を指す」「一方、look は対象の映像を捉えようとする努力を指す」「I looked, but I couldn't see. と言える」「日本語に訳せば「見ようとしたが、見えなかった」であろう」などの事実が観察されることから、2A と 2B を分けているのであり、これはいわば意志知覚と結果知覚というべきものかもしれない。これは 3.2.1. で見た東南アジア大陸部孤立型言語の意志動詞と結果動詞の 2 つのグループの違いにたいへんよく似ている。

今回の調査では、see には「見える」が、look には「見る」が対応するものとして例文を作成し調査を行った。その結果、角田 (2009) とは異なり、能動知覚の方が受動知覚より他動性が高いという結果が出た。しかしこのことは全ての言語についてあてはまるわけではなく、一部の言語群ではやはり受動知覚の方がより典型構造を好み、別の言語群では能動知覚の方が典型構造を好んでいて、その差し引きの結果、トータルでは能動知覚の方が高くなった、というものである。前者を知覚結果他動型の言語群、後者を能動知覚他動型の言語と呼ぶことにすると、今回の調査で知覚結果他動型を示したのは、アラビア語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、ブルガリア語、ポーランド語、マダガスカル語、リトアニア語、ソロン語、ニブフ語であり、能動知覚他動型を示したのは、ウズベク語、ダグール語、マレーシア語、モンゴル語、ラオ語、中国語、朝鮮語、日本語、であった。例外はあるものの、系統や類型に偏りがあることが分かる。すなわち知覚結果他動型には欧州の印欧語が多く、能動知覚他動型の言語には典型的に見たアルタイ型言語、アルタイ諸言語が多い。能動知覚他動型のうちウズベク語、モンゴル語では自動詞化による態の転換が、マレーシア語でも接頭辞による態の転換がみられるので、当然他動性には違いが出て来る。他方、知覚結果他動型の言語では英語の see vs. look のように全く異なる動詞を用いたり、逆に全く同じ動詞であったりしている。

Malchukov (2005: 101-103) では、この 2A と 2B に関して角田 (2009) が主張する階層には、東フツナ語 (ポリネシア) やコーカサスのいくつかの言語などの能格絶対格構造の言語において、例外が見られるとし、さらなる説明を試みている。しかし、Malchukov (2005) の示す一般規則は、能動知覚と受動知覚が語彙的に異なる言語において、反例が見出されるとしている。

今回の調査では、see に「見える」が、look には「見る」が対応するものとして例文を作成したが、日英でこのような語彙が意味的に対応するという保証はない。日本語では、[たとえば、海が見えると言われて]「??見たが見えなかった」や[サイレンの音が聞こえると言われて]「??聞いたが聞こえなかった」などは、非文と言わないまでもかなり許容度は低いと思われる。角田 (2009) にあったように、I looked, but I couldn't see. は「見ようとしたが、見えなかった」となる。したがって、厳密には look にあたるのは「見ようとする」や「目をやる」として例文を作成し、調査すべきものなのかもしれない。「目をやる」であれば、「そちらに目をやった」となるので、非典型構造となる。しかし、「見える」に対して「目をやる」はずっと頻度の低い形式と考えられるので、こうした調査方法にも難点は残る。

筆者は今回の調査結果から、知覚結果他動型の言語群と能動知覚他動型の言語群があり、それは他の類型的な特徴と連動しているのではないかと考える。

3.4.6. 好悪

好き嫌いは、どちらかと言えば積極的な感情であり、ある程度コントロールが可能な感情のように感じられる。調査結果も、やはり感情の中ではもっとも他動性の高いものとなった。

点数が 0 であったのはウルドゥー語だけで、1 であったのもペルシア語、モンゴル語、日本語だけである。ウルドゥー語では広く感情には与格構文が用いられ、ペルシア語の「嫌う」には「彼から私の悪感情がやって来る (または好感情がやって来ない)」のような構成の非人称構文が観察される。

3.4.7. 言語行動

今回「言語行動」を調査するにあたって用いた例文 ((19) a. 私はその理由を彼に訊いた。 b. 私はそのことを彼に話した。) において、日本語では発話内容が対格目的語となり、発話相手が与格項となっている。このようないわば 3 項動詞を調査例文に選んだので、ここで「3.4.9. 社会行為」と同様に、Secundative と Indirective 的な違い

が問題となる。ここでは、日本語同様、発話内容を対格等に、発話相手を他の斜格や側置詞等にする言語を **Indirective** とし、逆を **Secundative** と呼ぶことにする。さらに、二重目的語になる場合と、両方とも斜格や側置詞で示す言語も存在する。両方2つのパターンが観察される場合にはその両方を記した。なお点数化にあたってはどちらかの項が対格などで示されていれば2点とした。

[訊く]

二重目的語：マダガスカル語、マレーシア語、ポルトガル語、リトアニア語、中国語

Indirective：イタリア語、ウズベク語、ウルドゥー語、スペイン語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、フランス語、ペルシア語、マダガスカル語、マレーシア語、モンゴル語、ラオ語、ニブフ語、朝鮮語、日本語

Secundative：アラビア語、ブルガリア語、ポーランド語、リトアニア語

両方斜格や側置詞：ロシア語

[話す]

二重目的語：マダガスカル語、マレーシア語、中国語

Indirective：アラビア語、ウズベク語、ウルドゥー語、スペイン語、ポルトガル語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、フランス語、ペルシア語、マダガスカル語、マレーシア語、ラオ語、リトアニア語、ニブフ語、朝鮮語、日本語

Secundative：アラビア語

両方斜格や側置詞：イタリア語、スペイン語、ブルガリア語、ポーランド語、ロシア語、モンゴル語、リトアニア語

この結果を大雑把にまとめるならば、東南アジアの孤立型タイプには二重目的語構文が用いられ、他方、特に「話す」においてはヨーロッパの言語に両方斜格や側置詞の言語が多くみられる。大多数の言語、特にアルタイ諸言語はもっぱら **Indirective** であり、一貫して **Secundative** なのはアラビア語のみであった。「訊く」に関して **Secundative** なのもバルト・スラブ諸語のみであった。

格についてみると、モンゴル語で「訊く」には奪格、「話す」には与格が用いられていて、2つの動詞は相反する面を示すが、このようなはっきりとした対立はあまり他の言語では観察されなかった。

3.4.8. 能力

(13)a. 「車の運転」については、運転するを不定詞にして、can drive のように表現するものと、日本語のように「車が／を 運転できる」として、車を対象にして表現するものがあるが、どちらも典型表現として扱った。なおブルガリア語は、バルカン言語連合の特徴だが、不定詞を失って接続法に依っているのだが、これも英語型として扱うことにした。

以下に分析の結果を示す。

「運転」

典型英語型：アラビア語、イタリア語、ウズベク語、ペルシア語、ウルドゥー語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ブルガリア語、ロシア語、ポーランド語、マダガスカル語、マレーシア語、リトアニア語、中国語、朝鮮語

典型日本語型：ニブフ語 (?)

非典型のみ：ラオ語

動詞や文による：イタリア語、ウイグル語、ペルシア語、ウルドゥー語、マダガスカル語、マレーシア語

副動詞に可能の意の動詞を続ける：ウイグル語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、モンゴル語

「泳ぎ」

典型：イタリア語、ウイグル語、スペイン語、フランス語、ブルガリア語、ロシア語、ポーランド語、マダガスカル語、マレーシア語、リトアニア語、中国語、朝鮮語、ニブフ語

非典型のみ：ペルシア語、ラオ語

動詞や文による：イタリア語、ウイグル語、ウルドゥー語、マダガスカル語、マレーシア語

副動詞に可能の意の動詞を続ける：ウイグル語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、モンゴル語

上記のように、典型（英語）型の言語が多くを占める。ラオ語では通常考えられる助動詞-動詞の語順とは異なった語順が現れている。複数の表現が可能な言語も多く、これは上記で「動詞や文による」ものとして特に分類してみた。チュルク、モンゴル、

ツングースの別を問わずアルタイ諸言語では、副動詞に可能の意の助動詞を続けるパターンが優勢である。この副動詞を不定詞相当のものと考えれば、これも典型英語型ということになる。

他方、斜格主語をとる言語は意外に少ないが、ウルドゥー語に与格構文が観察される。

英語やトルコ語などもそうだが、一般に指摘されているように、「知る」の意が可能表現に文法化することが少なくない。今回の調査では、ウズベク語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ニブフ語、朝鮮語において「知る」の文法化が観察された。

3.4.9. 社会行為

今回の調査では、「助ける／手伝う」という動詞を「社会行為」として取り上げた。日本語では「誰々を手伝う」、「誰々が～するのを手伝う」となる2項動詞であるが、例えばロシア語では相手に与格をとる。さらに「私は彼がそれを運ぶのを手伝った」は Я помог ему донести это. のように目的語相当の不定詞をとるので、授受動詞にも似た3項動詞となる（なおウズベク語では「助けを与える」のような慣用的な動詞句を用いるので表面的には4項動詞となるようだ、そこでの構文はペルシア語のものに似ており、影響も考えられよう）。日本語とロシア語の違いは、一括支配型と分割支配型の違いということになる（風間 1994 を参照されたい）。この項目の構文に関する問題については、Malchukov, Haspelmath and Comrie (2010) がもっとも参照すべき重要な文献であると思われるが、現時点で筆者未見である。

今回調査して見たところ、まず(18)aで、相手に対格を用いる言語とそうでない言語がある。(18)b「私は彼がそれを運ぶのを手伝った」において、相手に対格を付与する言語と手伝う行為の内容に対格を付与する言語などが観察されたが、そのどちらでも典型構造として扱うことにした。この違いは授受動詞における *Secundative* と *Indirective* の違いに対応するものといえよう。(18)bではさらに一括支配型と分割支配型の違いも観察された。

まず(18)aで、相手に対格（／典型）を付与する日本語型の言語は、アラビア語、イタリア語、スペイン語、フランス語、ダグール語ハイラル方言、ソロン語、ナーナイ語、マダガスカル語、ラオ語、モンゴル語ホルチン方言、中国語、朝鮮語であった。

他方、対格（／典型）以外を付与するロシア語型の言語には、ペルシア語、ウズベク語、ダグール語チチハル方言、ブルガリア語、ポーランド語、ロシア語、モンゴル

語ハルハ方言、ニブフ語、リトアニア語、であった。ポルトガル語では動詞によって両方可能である。

印欧語でもロマンス諸語とスラブ諸語では分かれ、ダグール語やモンゴル語では方言によっても分かれることが分かる。その他に、ウルドゥー語では動作名詞構文となる。

次に(18)bについては、下記のように分類した。

- A. 一括支配・対格 (／典型)：モンゴル語ホルチン方言，ラオ語，中国語，ニブフ語，朝鮮語
- B1. 分割支配・相手が対格 (／典型)：スペイン語，ポルトガル語，イタリア語，フランス語，アラビア語
- B2. 分割支配・行為が対格 ((／典型もしくは不定詞などの目的語)：ペルシア語，ブルガリア語，ポーランド語，ロシア語，マダガスカル語 (?), リトアニア語
- B3. 分割支配・両方とも対格：ソロン語，ナーナイ語
- B4. 分割支配・両方とも与格：モンゴル語ハルハ方言
- B5. 分割支配・その他：ウズベク語，ウルドゥー語，ダグール語

ラオ語および中国語はいわば兼語文で，動詞連続とみることもできる。

分類結果は多様であり，一応分類してはみたものの，この分類がどのような意味を持っているのか，明らかでない。他の類型的特徴と関連がないか，など，今後研究して行く必要がある。

3.4.10. 直接影響不変化

すでに上記に述べたように，今回の調査で先行研究との違いが最も大きく現れた点は，この直接影響不変化の他動性がかなり低い，という点であった。そこでその原因を探るためにまず点数が3~2もしくは0であった言語と，4以上であった言語に分けてみた。すると，0~3であったのは，イタリア語，スペイン語，ポルトガル語，ウルドゥー語，ペルシア語，リトアニア語のみであった。このうち，ペルシア(47)，リトアニア(37)，ウルドゥー(24)，の3言語はもっとも他動性の低さを示す言語群であるのに対し，スペイン(64)とポルトガル(59)，イタリア(59)の両言語は逆に高い他動性を示す言語である。

ペルシア語，ウルドゥー語ではここでも動作名詞構文が現れ，対象は前置詞や与格による表現になる。イタリア語とスペイン語，ポルトガル語では多様な前置詞が現れている。

直接影響不変化に関して、他動作が低いという結果が出た原因は、これらの言語で「移動」の自動詞に現れる場所的な表現が他動詞における対象においても現れたものとする。つまり他動詞の対象が場所的に捉えられた結果であるとする。この考えは Malchukov (2005) が *contact -- pursuit -- motion* を連続したものとして捉えたことにヒントを得たものである。しかし筆者が今回のデータを見た印象では、「追及」に関してはあまり接触や移動と類似した構造が現れていたようには思えなかった。

ただし、上記のような原因についての考察は、まだ十分に検討したものではなく、今後の検証を必要とする。

3.4.11. 相互

相互的な動作「会う」も他動性は比較的高く、日本語の「～と会う」のようにもっぱら非典型構文をとるのはウルドゥー語のみであった。なおウルドゥー語では奪格が用いられている。

3.4.12. 必要等の感情

「欲しい」と「必要だ」は、非常に近い意味内容を持っていると考えられるが、諸言語の例を見てみると、他動性、意志性、コントロール、アスペクト、主観／客観、などの面で少しずつ違いがあるようだ。言語によって、同じ述語で表現している言語もあれば、異なる述語に拠っている言語もある。「必要だ」の方では特に、形容詞による表現が現れており、これはアスペクト的な点における恒常的な性質を示すものだろう。「必要」とは未来の所有と捉えることもでき、所有／存在構文との関連についても今後検討して行く必要があると考えている。

3.4.13. 移動

「到着」「横断」「経由」の3つのどれにも他動的表現を用いる言語はラオ語と中国語のみで、2つに用いるのはフランス語、マダガスカル語、マレーシア語、ニブフ語、朝鮮語、日本語である。このうちフランス語とニブフ語、朝鮮語、日本語では、「横断」と「経由」に他動表現を用いる。フランス語では「到着」に前置詞を用いる。マレーシア語では「横断」に前置詞は現れず、「到着」と「経由」で前置詞は任意である。マダガスカル語においては、「到着」に指示詞のクッションを必要とする。「横断」と「経由」、特に「横断」において他動的構造をとる言語の多いことが分かる。

「横断」にのみ他動的表現を用いるのは、アラビア語、ウルドゥー語、スペイン語、

ポルトガル語、ソロン語、ナーナイ語、ブルガリア語、ロシア語、モンゴル語、で、リトアニア語でも「横断」においてのみ前置詞が任意である。イタリア語は「横断」が他動的表現であり、さらに「経由」において前置詞が任意である。

これに対し、ポーランド語は「経由」にのみ他動的表現を用いる。

やはり、総じて「横断」において圧倒的に他動的表現が現れる。マダガスカル語のように、「横断」の動詞の原義が「切る」であるような言語もあって、「横断」が他動詞と強いつながりを持っていることが分かる。

ラオ語の「到着」では「行く」と「着く」の動詞連続が用いられ、この後ろに目的語が来るが、これはやはりラオ語の(2)c「彼はその人にぶつかった」で「する」と「ぶつかる」の動詞連続があって目的語の来る構造が用いられることとよく対応している。

「到着」において多くの言語で現れる前置詞などは、直接影響不変化で現れるものとよく対応する。これは行為の到着点も、移動の到着点も同じように表現しようとする傾向であり、Malchukov (2005) がすでに agent-like な自動詞につながるものとして「>>接触>>追及>> (移動)」のような系列を示していることの一つの表われであると言えよう。

「移動」の動詞は自動詞であるのか、それがとる名詞項は目的語であるのか否か、などの点に関して、受身をはじめとするテストや検証が行われてきている。ここではその点については触れないが、少なくとも格を中心とした他動表現の現れという観点から見る限り、移動も他動性の階層の中に位置づけられ、自動詞へ続く連続体を形成するものと考えたい。

3.2.14. 包含関係

同じ「関係」にあっても、包含関係と類似関係では、日本語の「～が～を含む」のように、包含関係の方を他動表現によって表わす言語の方がずっと多い。

他には存在の構文、もしくは存在の構文に近い構文を用いて表現する言語が多い。存在と所有が連続した様相を示すことは前号の特集で見たとおりであるが、包含関係に他動表現が多いのはここに原因があると思われる。例えば、ラオ語では存在構文そのものである。中国語も「有」を用いているが、「海水」が場所として捉えられており、「海水里面」となっているので他動表現とはみなさなかつた。しかしこれを他動表現とみなすことも可能であろう。

3.4.15. 類似関係

上述したように、関係における点数のうちのほとんどは包含関係によるものである。類似関係で他動表現が用いられるのは、アラビア語、マダガスカル語、マレーシア語、ラオ語、朝鮮語の5言語に過ぎない。

3.4.16. 変化の関係

いわゆる「～に なる」の変化後の名詞がどんな格をとるか、という問題である。ここで他動的な表現をとるのは、アラビア語、マダガスカル語、マレーシア語、ラオ語、中国語、ニブフ語であった。アラビア語では、コピュラ文と「なる」文の構造は全く異なり、「なる」文は不定対格の名詞をとる。マダガスカル語とマレーシア語もコピュラ文と「なる」文の構造は全く異なる。これに対し、中国語とラオ語ではコピュラ文と「なる」文の構造はほぼ同じであり、ラオ語に至っては動詞も同じで、完了にすれば「なる」文となるが、完了にしなくとも文脈によってその意味になるという。中国語でも「なる」文には新しい状況の発生を示す「了」が用いられる点で、ラオ語と似ている。N1 是 N2 というコピュラ文における N2 も目的語であるという。東南アジア大陸部の高度に孤立型の言語群の示す共通性が現れているとみてよいだろう。

ウズベク、ダグール、モンゴル、ナーナイ、ソロンといったアルタイ諸言語では、「なる」文は接辞無しの形式を変化後の対象にとる。したがって不定の対格項と同じ形になるわけだが、これを対格とみるには問題がある。過去や否定などの際にコピュラ文で現れるコピュラの前の位置も接辞無しの名詞が現れる位置であり、「なる」文の変化後の対象を示す名詞はこれと同じものであると考えられる。ニブフ語についてもこれと同じことが言えるのかもしれない。

ロマンス諸語では、明示的な他動表現こそとらないものの、(17)ab に関して *make* にあたる動詞を用いた構文の現れる点が目を引く。イタリア語ではコピュラ文に、スペイン語、ポルトガル語では「なる」文に（再帰を伴って）、*make / render* にあたる動詞を用いた構文が用いられる。

3.4.17. 喜怒哀楽

喜怒哀楽の感情の中からは、一つは、積極的な働きかけの強い感情として「怒る」を選んだ。「(私の)母は(私の)弟がうそをついたのに怒っている」という文を用いたので、ここでも一括支配型と分割支配型、*Indirective* と *Secundative* の問題が生じる。

もう一つは、もっとも受動的で、むしろ感情の対象からの働きかけがもっとも強い

ものとして「怖い」を選んだ。

まず「怒る」について、一括支配か分割支配か、一括支配の場合に対格など典型的な他動表現をとるか否か、分割支配の場合にはどのような表現パターンになるか、についてみると、以下のものであった。なお中国語は怒りの原因を別個の独立した文で表現し、2文による表現であった。

一括支配対格／典型：なし

一括支配非典型：イタリア語、ウズベク語、スペイン語、ポルトガル語、ソロン語、ダグール語、フランス語、ポーランド語、ペルシア語、マダガスカル語、モンゴル語、朝鮮語、ニブフ語

分割支配：アラビア語、ウルドゥー語、スペイン語、ナーナイ語、ブルガリア語、ロシア語、マレーシア語、ラオ語、リトアニア語

二重目的語：なし

Indirective：なし

Secundative：マレーシア語、ラオ語

両方斜格や側置詞：アラビア語、ウルドゥー語、スペイン語、ナーナイ語、ブルガリア語、ロシア語、マレーシア語、リトアニア語

このように、一括支配になる言語と分割支配になる言語はともに一定数にのぼることがわかる。一括支配の場合、他動表現になることはないようだ。分割支配の場合、マレーシア語とラオ語では、怒りの対象となる人物が典型的な形での目的語として現れるが、他の大部分の言語では斜格や側置詞によって表現される。

次に「怖い／恐れる」についてみると、下記の結果に見られるように、感情を引き起こす対象を典型的標示の目的語としてとれるのはもっぱら(マダガスカル語を含む)東南アジア孤立型言語とニブフ語のみであることがわかる。

「～を恐れる」のように対格(／典型)をとる言語：マダガスカル語、マレーシア語、ラオ語、中国語、ニブフ語、ポルトガル語

非典型：イタリア語、ウズベク語、ウルドゥー語、スペイン語、ソロン語、ダグール語、ナーナイ語、フランス語、ブルガリア語、ポーランド語、ロシア語、ペルシア語、

リトアニア語、

両方あり得る：アラビア語、スペイン語、ポルトガル語、マレーシア語、モンゴル語

喜怒哀楽の場合には、感情主体の方が斜格になる言語も観察される。ウルドゥー語の「恐い」では与格構文のため、感情主体が斜格（与格）となっている。ブルガリア語では「怒る」と「恐い」の両方に対格の感情主体が現れる。

3.4.18. 生理的欲求

まず、点数が4なのは、イタリア、スペイン、ポルトガル、フランスの4つのロマンス諸語のみで、これは次の寒暖の感覚についてもほぼ同様である。ロマンス諸語は感覚表現にも一貫して他動詞による表現を用いるという点で、実は世界的に見ても珍しい言語といえるのではないだろうか。感覚表現などでも他動表現が現れることが原因でこれらの言語の他動性は高い値を示すことになる。

3.4.19. 寒暖等の感覚

上述したように寒暖等の感覚でも他動表現が現れるのは、4つのロマンス諸語のみである。

なおこれらの言語における(17)bの文では、**make**にあたる動詞が用いられるものの、非人称文とされており（フランス語のみ三人称主語の *il* が明示的に現れている）、他動詞文と見るには問題があるかも知れない。しかし（その統語的資格ははっきりしないが）**make**にあたる動詞の後ろに名詞「寒さ」が現れており、他動詞文とのつながりが考えられるため、ここではその特殊性も考慮し2点として扱った。対して(17)aの方はどれも「持つ」にあたる動詞を用いており、他動表現として扱うことに問題はないだろう。ロマンス諸語は格変化を失い **SVO** 語順が固定化するという歴史的变化を辿ってきたわけだが、その中で、**have**を意味する動詞を多用することにより、特に人間であれば意志性や動作性の低いものでも主語の位置に置く構文を大きく発展させてきたものと考えられる。逆に見ればこれらの言語の **have**にあたる動詞の意味（および統語的特性）は、多くの言語における「持つ」を意味する動詞のそれとは大きく異なっていると考えられる。

3.4.20. 上手下手

この項目は「寒暖等の感覚」とともに、今回調査した言語全体でもっとも低い他動

性を示すものということになった。その最大の原因は、おそらくこの上手下手という特性が時間的に恒常的な特性であり、形容詞をはじめとする要素によって表現されやすいことにあると考えられる。

上手下手が他動的な表現で表現可能なのは、中国語、リトアニア語、(この2言語は4点)、マレーシア語、ペルシア語、アラビア語(以上の言語は2点)、ウズベク語(1点)のみであった。

他の言語は、おおざっぱに言って、この上手下手を、上記のように形容詞によって示す言語と、動詞+副詞によって示す言語に大きく分かれるようである。形容詞によって示す言語では、基本的に対象が主格を取り、上手下手の能力を示す人間が斜格になることとなる。動詞+副詞によって示す言語は、ヨーロッパの言語に多いようだ。

3.5. その他の問題点

ここでは3つ問題点について、別個に取り上げることにする。

3.5.1. 「1A 直接影響変化」とされている動詞は必ず変化を含意するのか？

今回の調査でもやはり1Aの動詞は多くの言語で結果を含意するため、「殺したが死ななかった」のようには言えず、「殺そうとしたが死ななかった」などのような文が得られる。しかし、言えるとされる言語もあり、今回の調査ではそのような言語として、ウズベク語、マダガスカル語、ラオ語、中国語、が観察された。峰岸(2007: 214)には、タイ語においてやはり1Aの動詞が結果を含意しないことについての指摘がある。このことは上記3.2.1. で考察したとおりである。

3.5.2. 意志/無意志(接触表現に関して)

(2)c. 「彼はその人にぶつかった(故意に).」と(2)d. 「彼はその人にぶつかった(うっかり).」では、同じ動詞により意志無意志の違いが現れるかどうかを聞いた。この点に関してもその結果をまとめておく。なお副詞によってしかその違いを明確にできない言語は、「表現に違いのない言語」として分類した。なお以下で*のついている言語は、動詞の形等に違いがあるだけでなく、格や前置詞など、名詞項の方にも違いの現れる言語である。

表現に違いの現れた言語：アラビア語(無意志：ヴォイス VIII 形)、*ウズベク語(無意志：補助動詞)、*ウルドゥー語(意志：(能格絶対格)完了形完了構文+語彙)、ス

ペイン語（意志動詞 vs. 相互再帰）、*ナーナイ語（動詞語彙の違いによる）、*ブルガリア語（他動詞 vs. 再帰動詞）、*ペルシア語（動詞語彙の違いによる）、*ロシア語（他動詞 vs. 再帰動詞）、マダガスカル語（voa 被動作態（-control, -volitional））、マレーシア語（非意図 ter-）、*モンゴル語（無意志：相互態）、
表現に違いのない言語：イタリア語、ポルトガル語（ただし動詞の違いや再帰要素による若干の違いがみられる）、ソロン語、ダグール語、フランス語、ポーランド語、ラオ語（ただし het 「する」で故意の強調が可能）、リトアニア語、中国語、ニブフ語、朝鮮語（網羅的でないが「接尾辞」の有無で暗示される動詞のペアが存在する）、日本語

角田 (1991: 84) では、「一般に、他動詞文の格の実現に反映しているのは、被動作性である。意志性に関係ない・・・(中略)・・・しかし、非常に限られた場合ではあるが、意志性の存在が、他動詞文の方に反映している場合がある」としていた。その後の改訂版である角田 (2009: 88) では、「その後の研究で、他動詞文、或いは、原型的他動詞文に反映するのが被動作性ではなく、意志性である言語が存在することが判明した。パルデシ (2007) によると、この状況が南アジアの諸言語（マラーティー語、ヒンディー語、オリア語、マイティリ語、シンハラ語等の印欧語族の言語とテルグ語、タミール語等のドラビダ語族の言語）にある。」としている。

今回の調査結果から、上記の南アジアの印欧語に当てはまると思われるウルドゥー語に加え、さらに5つの言語でも意志性による格や前置詞の交替が観察されることが分かった。この違いの現れた言語には、無意志の方に再帰や相互などの態の変換を伴うものが多く、それゆえに名詞項にも違いが及んでいると考えられる。ただ、今回選んだ無意志の方の動詞が相互の意味合いを持つものただけに、純粋に意志性による違いとみることができかどうかについては、疑問の残る結果となってしまった。またこのような態の転換が意志性の有無と連動してどの程度義務的であるのかも問題である。モンゴル語の場合、ハルハ方言では態の転換が観察されたが、ホルチン方言の方には現れておらず、無意志だからといって必ずしも義務的に態を転換しなくとも良いように見受けられる。他方、オーストロネシア語族のマダガスカル語とマレーシア語の場合は、名詞項の方に変化はないものの、動詞の形式の選択はかなり義務的なものであるようだ。

角田 (2009: 89) は「今後の研究課題は、どのような言語で、どのような条件の下で、被動作性が働くか、或いは、意志性が働くかを調べることであろう。」としている。

やはり意志性の問題については、今後のさらなる研究が必要であると思われる。

3.5.3. 再帰

対象物が自分自身（及び自分の体の部分）である場合はもちろん再帰だが、対象物が所有物等である場合も、再帰的な行為となる。これは主体と対象との間の意味的關係であり、再帰接辞の出現をコントロールするのはあくまでもその文の主語であるので、格の機能を示す再帰の問題は“global”な観点からの格の指定の一種と考えることができよう。

アルタイ諸言語のうち、モンゴル諸語とツングース諸語においては、対象物に再帰人称がついていれば、対格が現れない（ただしモンゴル語ハルハ方言において、人間名詞の一部では対格が共起するという、梅谷博之氏の御教示による）。言い換えれば、再帰人称のついた形は対格の機能を兼ねる、という現象が観察される。さらにダグル語の場合は、3人称の人称要素がついた場合にも対格が現れないようだ（cf. ダグル語データ(1)a など。他の人称についてはまだ十分に確認できていないが、(7)a の1人称がついた場合には対格が現れている）。再帰人称と格の関係についても今後さらに研究を進めて行く必要がある。

3.6. 今後の課題

今回の調査結果には、角田 (2009) の表にある「所有・存在」の調査結果が入っていない。前号の特集で詳しくデータを収集したため、今回あらためて収集しなかったのだが、データの得られた言語の種類も食い違ってしまったため、結果的に整理が難しくなってしまった。「所有・存在」の動詞のデータも加えてその階層の位置づけも行う必要がある。

今回はもっぱら目的語（／動作対象）と考えられる方の名詞項がどのような格で現れるかに注目した分析であった。他方、与格構文を多用するウルドゥー語など、主語（／動作主・経験主）の方が斜格になったものにも注目し、これについても別途点数化して分析する必要がある。さらには両方のデータを総合して他動性の階層を立てる必要もあろう。

Onishi (2001) に詳しい考察があるが、動作主／経験主が統語的に主語であるのかどうか、動作対象が統語的に目的語であるのかどうか、軸項 (pivot) としての働きや再帰代名詞の支配などの点から検討することが必要だろう。特に表の右の方に行くと形容詞述語なども現れ、統語的資格と意味役割が食い違って来る。統語論的な位置づけ

は、どのような名詞項を対象にして分析を行うのかに関わってくるものと思われる。

表の右の方においてどの名詞項の格を問題にするかを判断するにあたっては、有生性等が関わっている。意味役割の問題を考えて行く際には、有生性をはじめとする名詞項の意味的性質を検討する必要もあると考える。

語研論集特集「他動性」へのご協力をお願い

語学研究所所長 高垣敏博

語研論集の特集について、このたび以下のような大枠で「**他動性**」に関する原稿作成あるいは言語データ提供（アンケート）をお願いすることになりました。

特集の趣旨は、自由な（したがって通常は相互に関連のない）投稿原稿ばかりではなく、「語研論集ならでは」というコンテンツを考えてみようということです。特集の個々の寄稿は論文でも研究ノートでも結構です。また、論文・研究ノートを書く余裕がないという場合には、下のようなアンケートに答える形で言語データ提供にご協力いただければと思います。アンケートについては、回答が重複してもいけませんので特集担当者と調整していただくこととなりますが、共通のテーマに関して、さまざまな言語における状況をまずは並べて見てみることから始めたいと考えています。

なおデータ提供の（第一次）締め切りは、2014年3月3日（月）とさせていただきます。

《アンケート項目とその意図や説明》

角田（2009）の研究は、格枠組みの観点から、二項述語といういわば「語彙」の面の階層を明らかにしたものだが、格枠組みは述語のみで決まるものではない。具体的な文では、対象が人間か非人間か、対象物が定か不定か、肯定文か否定文か、アスペクトはどうか、など、名詞の側の語彙・文法的な特性や、他の文法要素の実現によっても左右されることが Hopper and Tompson (1980) によって指摘されている。

	HIGH	LOW
a) Participants	2	1
b) Kinesis	action	non-action
c) Aspect	telic	atelic
d) Punctuality	punctual	non-punctual
e) Volitionality	volitional	non-volitional

f) Affirmation	affirmative	negative
g) Mode	realis	irrealis
h) Agency	A high in potency	A low in potency
i) Affectedness of O	O not affected	O not (totally) affected
j) O individuation	O highly individuated	O non-individuated

したがって、アンケートの対象言語でも、今回のアンケートの文の名詞や文法的条件によって、ある種の格枠組みが選択されることが考えられる。

もしこのような格の違いなどが存在する場合には、できる限りそのことについても触れていただくようお願いしたい。

また、名詞、特に地名などは、その言語やその言語を取り巻く社会・文化的状況においてもっとも適切で使用しやすいと思われるものに自由に変えていただいてもかまわない。

=====

<アンケート項目>

- (1) a. 彼はそのハエを殺した。 b. 彼はその箱を壊した。 c. 彼はそのスープを温めた。
d. 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。(発話可能かどうか?)

【直接影響・変化】[理論的には、どんな言語でも他動詞らしい格枠組みが現れるはずで、対格以外の斜格や、前置詞による表現などは現れないはずである(もしそのような言語があれば大きな発見ということになる)。また、影響の及ぶことが前提であるので、「殺したが死ななかった。」、「壊したが壊れなかった。」、「温めたが温まらなかった。」のような表現は非文であるはずである。しかしタイ語など、言語によってはこれが言えるものもあるようだ。ではそのような言語には確実に影響を含意する他動詞が別に存在するのか、それともそのような他動詞を全く持たないのか、が問題となる。]

- (2) a. 彼はそのボールを蹴った。 b. 彼女は彼の足を蹴った。
c. 彼はその人にぶつかった(故意に)。 d. 彼はその人にぶつかった(うっかり)。

【直接影響・無変化】[言語によってはすでにこの段階から前置詞等による表現が現れるようだ。角田 (2009) は他動性に関して「(対象物への)影響」の有る無しを最大の違いとみるが、「意志」(意図や随意など、類似の他の概念がありこれらは微妙に異なるが、ここで

はそれらを代表するものとして「意志」を用いることとする)を重要な違いとみる研究もあり、
c, d はこれを問題とするものである。]

(3) a. あそこに人が数人見える。 / I see some people there. b. 彼はその家を見た。

c. 誰かが叫んだのが聞こえた。 / I heard somebody cry out. d. 彼はその音を聞いた。

【知覚 2A vs. 2B】[角田 (2009) は、既に映像や音を捕えている、という点で 2B よりも 2A のほうが他動性が高いものとみなしている。この仮定は 2B で前置詞の現れる英語などにはうまく当てはまるが、2A で[-に-が]のような格枠組みが現れる日本語にはうまく当てはまらない。このことは Malchukov (2005) も問題としている。see/look at, hear/listen to, 見える / 見る, 聞こえる / 聞く, に近い意味範囲の動詞の使い分けがある言語は他にも多くあると思われるが、それらがどのような格枠組みを取るかが問題となる。]

(4) a. 彼は(なくした)鍵を見つけた。 b. 彼は椅子を作った。

【(知覚 2A) 発見・獲得・生産など】[「壊す」などのような動詞の目的語とは違って、発見・獲得・生産などの動詞の目的語はその行為を行う際には存在せず、行為の結果として生ずる。したがってこれは「被動目的語 (affected object)」に対して「達成目的語 (effected object)」として区別されることがある。言語によってはこれに対して異なった格や構文を用いるものもある。角田 (2009) はこれに対して類を立てていないが(「見つける」は知覚 2A に入れている)、調査し、その位置づけを考える必要がある。]

(5) a. 彼はバスを待っている。 b. 私は彼が来るのを待っていた。

c. 彼は財布を探している。

【追及】

(6) a. 彼はいろいろなことをよく知っている。 b. 私はあの人を知っている。

c. 彼には××語(ドイツ語, 中国語, …)がわかる。

【知識 1】[朝鮮語では「知る」と「わかる」に明確な区別がないという。他方、「(人を見識している)」の意味には別の動詞も多く存在するだろうと考え、b. の調査文を用意した。例えばロシア語では znat' 「知る」の他に、mne izvestno 「私にわかっている」のような格枠組みの文も可能であるとされている (Malchukov 2005)。他の言語でも格枠組みの異なる他の述語があれば示していただければ幸いである。]

- (7) a. あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？
b. 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

【知識2】

- (8) a. 母は子供たちを深く愛していた。
b. 私はバナナが好きだ。 c. 私はあの人を嫌いだ。

【感情1】[日本語であれば, b. や c. に関して, 「バナナを好む」, 「あの人を嫌っている」のように動詞による表現もあり, 当然格枠組みは変わってくる. 他の言語でも異なった品詞による表現が可能であろうか? 可能な場合, 格枠組みはどうなるだろうか.]

- (9) a. 私は靴が欲しい。 b. 今, 彼にはお金が要る。

【感情2】[やはり, 「～を欲しがっている」, 「～を必要としている」のように異なった表現が可能であろうか? その違いはどのような文法的条件もしくはニュアンスの違いと関連しているだろうか?]

- (10) a. (私の)母は(私の)弟がうそをついたのに怒っている。
b. 彼は犬が恐い。

【感情3】[この2文は, 感情主体がもっとも積極的に関与する感情(「怒る」)と, 消極的に関与する感情(「恐い」)の例文であると言ってもよいだろう. やはり「～が腹立たしい」や「～を恐れている」のような異なった格枠組みを取る述語の存在が考えられる.]

- (11) a. 彼は父親に似ている。 b. 海水は塩分を含んでいる。

【関係1】[状態性の述語である. なお所有や存在の文については, 前回の特集で詳しく扱ったので今回は調査を見送った.]

- (12) a. 私の弟は医者だ。 b. 私の弟は医者になった。

【関係2】[角田 (2009) は「なる」を関係に入れているが, 「なる」による文はコピュラ文/名詞述語文と深い関係を持っているものと考えられる. したがってこのような調査文を設定した.]

- (13) a. 彼は車の運転ができる。 b. 彼は泳げる。

【能力1】[動作性名詞の可能表現と, いわゆる可能動詞の調査文を設定した.]

(14) a. 彼は話をするのが上手だ. b. 彼は走るのが苦手だ.

【能力2】

(15) a. 彼は学校に着いた. b. 彼は道を渡った／横切った. c. 彼はあの道を通った.

【移動】[移動は基本的に自動詞と考えられるものの, 到着点や通り道をはじめ, 対格や他動詞的格枠組みを取る言語もある程度存在するのではないかと考えられる.]

(16) a. 彼はお腹を空かしている. b. 彼は喉が渴いている.

【感覚1】

(17) a. 私は寒い. b. 今日は寒い.

【感覚2】[完全な一項, もしくは0項の感覚述語である.]

(18) a. 私は彼を手伝った／助けた. b. 私は彼がそれを運ぶのを手伝った.

【(社会的)相互行為1】[Malchukov (2005) のいう interaction である. ロシア語など欧州の言語では, 「助ける」が相手に与格をとることが見られるようだ.]

(19) a. 私はその理由を彼に訊いた. b. 私はそのことを彼に話した.

【(社会的)相互行為2(言語行動)】[interaction のうち, 言語活動に関する動詞の格枠組みは通言語的に是非とも調査すべきものであると思われる.]

(20) 私は彼に会った.

【再帰・相互】[Malchukov (2005) のいう middle は再帰・相互を広く意味しているという. なお 17号ヴォイス特集では「体を洗う, 手を洗う, 殴り合う」などの表現について既に調査している. そのためここでは相互についてこの(20)の調査文を補うことにした. なお, Malchukov (2005) のいう Affected Agent は, eat, take などの動詞であり, 典型的他動詞と感覚動詞の間であろうとしているが, 「食べる」に関するいくつかの文についてヴォイス特集で調査済である.]

参考文献

- DeLancy, S. (1985) Agentivity and Syntax. *CLS* 21(2): 1-12.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language*. 56. 251-299.
- 風間伸次郎 (1994) 『ナーナイ語の「一致」について』北大言語学研究報告 5. 札幌：北海道大学
- 風間伸次郎 (1999) 「ツングース諸語における指定格について」『東京外国語大学語学研究所論集』 4: 51-79.
- Malchukov, A. L. (2005) Case pattern splits, verb types and construction competition. In M. Amberber and H. de Hoop (eds.), *Competition and variation in natural languages: The case for case*, 73-117. London and New York: Elsevier.
- Malchukov, A. L., M. Haspelmath and B. Comrie (2010) *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*. Mouton de Gruyter.
- Malchukov, A. and P. de Swart (2009) Different Case Marking and Actancy Variations. Malchukov, A. and A. Spencer (eds.) *The Oxford Handbook of Case*. Oxford University Press: 339-355.
- 峰岸真琴 (2007) 「孤立語の他動詞性と随意性 —タイ語を例に—」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』. 東京：くろしお出版. 205-216.
- Onishi, M. (2001) Introduction: Non-Canonically Marked Subjects and Objects: Parameters and Properties. In A. Y. Aikhenvald, R. M. W. Dixon, and M. Onishi (eds.) *Non-Canonical Marking of Subjects and Objects*. Amsterdam: John Benjamins. 1-51.
- パルデシ, プラシヤント (2007) 「「他動性」の解剖：「意図性」と「受影性」を超えて」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』. 東京：くろしお出版. 179-190.
- Tsunoda, T. (1981) Split case-marking in verb types and tense/aspect/mood. *Linguistics*, 19, 389-438.
- Tsunoda, T. (1985) Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics*, 21. 385-396.
- 角田太作 (1991) [改訂版 2009] 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版

[付録]: 分析データ

アビ^ア: 1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対, 2c 主対, 2d 主前, 4b 主対, 3a 主対, 3c 主対, 4a 主対/主前, 3b 主前, 3d 主前, 5a 主対, 5b 主対, 5c 主前, 6a 主対/ [所有構文], 6b 主対, 6c 主対, 7a 主対, 7b 主対, 8a 主対, 8b 主対, 8c 主対, 9a 主対, 9b 主前, 10a 主前 r 前 t, 10b 主対/主前, 18a 主対, 18b 主対 r 前 t, 19a 主対 r 前 t, 19b 主対 r 前 t/主前 r 前 t, 20 主対, 11a 主属 (目), 11b 主前, 12b 主対, 13a 主対, 13b 主対, 14a 主前, 14b 主対, 15a 主前, 15b 主対, 15c 主前, 16a 主, 16b 主, 17a 主前, 17b 対 [名]

イ列^イ: 1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目/主前, 2b 主与 w 目 p, 2c 主前, 2d 主前, 4b 主目, 3a 主目, 3c 主目, 4a 主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主目/主前, 8a 主目, 8b 与主, 8c 主目, 9a 主目, 9b 与主, 10a 主前, 10b 主前, 18a 主目, 18b 主目 r 前 t, 19a 主与 r 前 t, 19b 主前 r 前 t, 20 主目/主前, 11a 主与, 11b 前主/主目, 12b 主補, 13a 主不, 13b 主不, 14a 主 [副], 14b 主 [副], 15a 主前, 15b 主目, 15c 主目/主前, 16a 主目, 16b 主目, 17a 主目, 17b 主目

ウス^ウ: 1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対, 2c 主与, 2d 主与, 4b 主対/主無, 3a 主, 3c 項無し無 (3人称), 4a 主対, 3b 主対, 3d 主対, 5a 主対/主無, 5b 主対, 5c 主対, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対, 7a 主, 7b 主対, 8a 主対, 8b 主対, 8c 主対, 9a 主無, 9b 与主, 10a 主後, 10b 主奪, 18a 主与, 18b 主与 r 処 t, 19a 主対 t 奪 r, 19b 主対 t 与 r, 20 主対/主後, 11a 主与, 11b 与主, 12b 主補, 13a CVB/主対, 13b CVB, 14a 主 [副]/主無, 14b 主 [副], 15a 主与, 15b 主奪, 15c 主奪, 16a 主 [形], 16b 主, 17a 主, 17b 項無し [形]

ウト^ウ: 1a 能絶, 1b 能絶, 1c 能絶, 2a 能与, 2b 能与, 2c 能奪, 2d 与奪, 4b 能絶, 3a 絶?, 3c? , 4a 与絶, 3b 能絶, 3d 能絶, 5a 絶属, 5b 絶属, 5c 絶属, 6a 絶項無し, 6b 絶与, 6c 与絶, 7a 与絶, 7b 斜絶, 8a 絶与, 8b 与絶, 8c 与絶, 9a 絶絶, 9b 与絶, 10a 絶処, 10b 与奪, 18a 能属, 18b 能処, 19a 能絶 t 奪 r, 19b 能絶 t 斜 r, 20 絶奪, 11a 絶奪, 11b 処絶, 12b 絶補, 13a 能絶, 13b 能絶, 14a 絶 [副], 14b 絶処, 15a 絶斜, 15b 能絶, 15c 絶奪, 16a 与絶, 16b 与絶, 17a 与絶, 17b 項無し絶

ウイ^ウ: 1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目/主前, 2b 主与 w 前 p, 2c 主前, 2d 主前, 4b 主目, 3a 主, 3c 主目 (不定詞), 4a 主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目/主前, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主目, 8a 主前, 8b 与主, 8c 主目/与主, 9a 主目, 9b 主目, 10a [複文]/与主, 10b 主前, 18a 主目, 18b 主目 r 前 t, 19a 主与 r 目 t, 19b 主与 r 目 t/主与 r 前 t, 20 主目, 11a 主前, 11b 主目, 12b 主補, 13a 主目, 13b 主目, 14a 主 [副]/主 [形], 14b 与主, 15a 主前, 15b 主目, 15c 主前, 16a 主目, 16b 主目, 17a 主目, 17b 主目

ボルト^ボ: 1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目/主前, 2b 主前, 2c 主前, 2d 主前, 4b 主目, 3a 主目, 3c 主目, 4a 主目, 3b

主前, 3d 主目, 5a 主前, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主前, 7b 主前/主目, 8a 主目, 8b 主前, 8c 主前/主目, 9a 主目, 9b 主前, 10a 主前/ [複文], 10b 主前/主目, 18a 主目/主前 r 目 t, 18b 主目 r 目 t, 19a 主目 r 目 t, 19b 主目 r 前 t, 20 主目/主前, 11a 主目, 11b 主目, 12b 主補, 13a 主目, 13b 主目, 14a 主前/主 [形], 14b 主前, 15a 主前, 15b 主目, 15c 主前, 16a 主目, 16b 主目, 17a 主目, 17b 主

ワウ:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対, 2c 主対, 2d 主対, 4b 主無, 3a 主対, 3c 主対, 4a 主再, 3b 主対, 3d 主対, 5a 主無, 5b 主対, 5c 主再, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対, 7a 主対, 7b 主対, 8a 主再, 8b 主 [形], 8c 主対, 9a 主不定対格, 9b 主与, 10a 主浴, 10b 主奪, 18a 主対, 18b 主対 r 与 t, 19a 主対 r 奪 t, 19b 主与 r 対 t, 20 主対, 11a 主具, 11b 主 [形], 12b 主補, 13aCVB, 13bCVB, 14aCVB, 14bCVB, 15a 主与, 15b 主対, 15c 主浴, 16a 主, 16b 主, 17a 主, 17b 主 [形]

ダゲール:1a 主対, 1b 主無 (3 人称), 1c 主再, 2a 主対, 2b 主無 (3 人称), 2c 主対, 2d 主対, 4b 主再, 3a [2 文], 3c [2 文], 4a 主再, 3b 主対, 3d 主無 (3 人称), 5a 主対, 5b 主無 (3 人称), 5c 主再, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主無 (3 人称), 7a 主無 (1 人称), 7b 主無 (3 人称), 8a 主再, 8b 主対, 8c 主対, 9a 主無, 9b 主無, 10a [2 文], 10b 主奪, 18a 主与, 18b 主与, 19a 主与, 19b 主与, 20 主対, 11a 主 pPROP, 11b 主 [形], 12b 主補, 13aCVB, 13bCVB, 14aCVB, 14bCVB, 15a 主与, 15b 主具, 15c 主具, 16a 主, 16b 主, 17a 主, 17b 主 [形]

ナナイ:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対 w 対 p, 2c 主対, 2d 主具, 4b 主対/主指, 3a 主対, 3c 主対, 4a 主対, 3b 主対, 3d 主対, 5a 主対, 5b 主対, 5c 主対, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対, 7a 主対 (斜格標示), 7b 主対, 8a 主再, 8b 主対, 8c 主対, 9a 主再, 9b 主対/主 (否定), 10a 主方, 10b 主具, 18a 主対, 18b 主対, 19a 主方, 19b 主方, 20 主対, 11a 主方, 11b 主後, 12b 主補, 13aCVB, 13bCVB, 14a 主 [副], 14b 主 [副], 15a 主方, 15b 主対, 15c 主処, 16a 主, 16b 主, 17a 与, 17b 項無し

ワウス:1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主前, 2b 主前, 2c 主目, 2d 主目, 4b 主目, 3a 主目, 3c 主目, 4a 主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主前, 7b 主目, 8a 主目, 8b 主目/与主, 8c 主目/与主, 9a 主前, 9b 主前, 10a [複文], 10b 主前, 18a 主目, 18b 主目 r 前 t, 19a 主目目, 19b 主目 r 前 t, 20 主目, 11a 主前, 11b 主目, 12b 主補, 13a 主目, 13b 主目, 14a 主 [副], 14b 主 [副], 15a 主前, 15b 主目, 15c 主目, 16a 主目, 16b 主目, 17a 主目, 17b 主目

ブルカリア:1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目, 2b 主目, 2c 主目, 2d 主前, 4b 主目, 3a 主目, 3c 主目, 4a 主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主目, 8a 主目, 8b 主目, 8c 主目, 9a 主目, 9b 主前/与主, 10a 主前 r [複文], 10b 主前/目前, 18a 主与, 18b 主与 r 目 t, 19a 主目 r 前 t, 19b 主与 r 前 t, 20

主目／主前, 11a 主前, 11b 主目, 12b 主補, 13a 主目, 13b 主目, 14a 与主／主前, 14b 与主／主前, 15a 主前, 15b 主目, 15c 主前, 16a 主 [形], 16b 主 [形], 17a 与 [形], 17b 項無し? [形]

へ°ルシア:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主前, 2b 主対, 2c 主前, 2d 主前, 4b 主無／主対, 3a 主／主対, 3c 主／主無, 4a 主対, 3b 主対, 3d 主対, 5a 主 EZ, 5b 主開代, 5c 主 EZ, 6a 主-無強勢の i, 6b 主対, 6c 主無, 7a 主対, 7b 主, 8a 主前, 8b 主無, 8c (題) 奪, 9a 主無, 9b 主前, 10a 主前, 10b 主前, 18a 主前, 18b 主開代, 19a 主対 t 奪 r, 19b 主対 t 前 r, 20 主対, 11a 主 EZ／主前, 11b 主無, 12b 主補, 13a 主動名?, 13b 主動名?, 14a 主前, 14b 主動名?, 15a 主前, 15b 主前, 15c 主前, 16a 題 [存在文], 16b 題 [存在文], 17a 題 [存在文], 17b 項無し [形]

ボ°ラント:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対 w 前 p, 2c 主対, 2d 主対, 4b 主対, 3a 主対, 3c 主対, 4a 主対, 3b 主前, 3d 主対, 5a 主前, 5b 主前不, 5c 主属, 6a 主前, 6b 主対, 6c 主対, 7a 主対, 7b 主対, 8a 主対, 8b 主対, 8c 主属, 9a 主対, 9b 主与／主対, 10a 主前, 10b 主対, 18a 主与, 18b 主与不, 19a 主対 r 前 t, 19b 主与 r 前 t, 20 主対／主前, 11a 主前, 11b 主対, 12b 主具, 13a 主不, 13b 主不, 14a 主 [副], 14b 主 [副], 15a 主前, 15b 主前, 15c 主対, 16a 主 [形] / 与不, 16b 主 [形] / 与不, 17a [形] 与, 17b 項無し [形]

ロ°シ:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対 w 前 p, 2c 主対, 2d 主前, 4b 主対, 3a 主対, 3c 主, 4a 主対, 3b 主対, 3d 主対, 5a 主対, 5b 主対, 5c 主対, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対, 7a 主対, 7b 主対, 8a 主対, 8b 主対, 8c 主属, 9a 与主, 9b 主前, 10a 主前 r 前 t, 10b 主属, 18a 主与, 18b 主与不, 19a 主前 r 前 t, 19b 主与 r 前 t, 20 主対, 11a 主前, 11b 主対, 12b 主具, 13a 主不, 13b 主不, 14a 主 [副], 14b 主 [副], 15a 主前, 15b 主対, 15c 主前, 16a 主, 16b 主, 17a 与, 17b 項無し

マダ°カ°スル:1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目, 2b 主目, 2c 主目, 2d 主目, 4b 主目, 3a 主目, 3c 主目?, 4a 主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主目, 8a 主目, 8b 主目, 8c 主目, 9a 主目?, 9b 主目, 10a 主前, 10b 主目, 18a 主目, 18b 主目, 19a 主目, 19b 主目, 20 主目／主前, 11a 主目／主前, 11b 題主 [存在文] / 前主 [存在文], 12b 主目, 13a 主目, 13b 主目, 14a 主, 14b 主, 15a 主-場所名詞, 15b 主目, 15c 主目?, 16a 主, 16b 主, 17a 主, 17b 主

マレ°シア:1a 主目, 1b 主目, 1c 主目, 2a 主目, 2b 主目, 2c 主目, 2d 主目, 4b 主目, 3a 主目／主, 3c 主, 4a 主目／主前, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目／主前, 6b 主目／主前, 6c 主目, 7a 主目／主前, 7b 主目, 8a 主目／主前, 8b 主目, 8c 主目／主前, 9a 主目／主前, 9b 主目／主前, 10a 主目, 10b 主目／主前, 18a 主人, 18b 主目, 19a 主目 t 前 r / 主前 t 前 r, 19b 主人目 t / 主人前 t, 20 主目／主前, 11a 主目, 11b 主目, 12b 主目, 13a 主前, 13b 主目, 14a 主目／主前, 14b 主目／主前, 15a 主目／主前, 15b 主目, 15c 主目／主前, 16a 主, 16b 主, 17a 主, 17b 主

モンゴ:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主対, 2c 主対, 2d 主共, 4b 主無, 3a 主, 3c 主, 4a 主対, 3b 主対, 3d 主
対, 5a 主無, 5b 主対, 5c 主再, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対, 7a 対主, 7b 主対, 8a 主再, 8b 主与, 8c 主与, 9a 主再, 9b 与
主, 10a 主与, 10b 主奪, 18a 主与, 18b 主与 r 与 t, 19a 主奪 r 对 t, 19b 主後 t 与 r, 20 主共, 11a 主共, 11b 与主, 12b
主補, 13aCVB, 13bCVB, 14a 主与, 14b 主主, 15a 主与/主後, 15b 主無, 15c 主具, 16a 主, 16b 主, 17a 主[形], 17b
主 [形]

ヲ:1a 主目, 1b 主 Vt 目 Vi, 1c 主目, 2a 主目, 2b 主目, 2c 主目, 2d 主目, 4b 主目, 3a 項無し目, 3c 項無し目, 4a 主
Vt 目 Vi/主目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主目, 8a 主目, 8b
主目, 8c 主目, 9a 主目, 9b 主目, 10a 主目 r, 10b 主目, 18a 主目, 18b 主目, 19a 主目, 19b 主目 t 前 r, 20 主目/主前,
11a 主目, 11b 主目, 12b 主目, 13aV 可能(主主), 13bV 可能(主主), 14aV 上手(主主), 14bV 下手(主主),
15a 主目, 15b 主目, 15c 主目, 16a 主 [形], 16b 主 [形], 17a 主 [形], 17b 主 [形]

ヲ7:1a 主対, 1b 主対, 1c 主対, 2a 主対, 2b 主与 w 前 p, 2c 主前, 2d 主前, 4b 主対, 3a 主対, 3c 主対, 4a 主対, 3b
主対/主前, 3d 主属, 5a 主属, 5b 主属 r, 5c 主属, 6a 主対, 6b 主対, 6c 主対/主具, 7a 主対, 7b 主対, 8a 主対, 8b
主対/与主, 8c 与主, 9a 主属, 9b 与属/与主, 10a 主前 r 前 t, 10b 主属, 18a 主与, 18b 主与 r, 19a 主属 r 属 t, 19b
主与 r 前 t, 20 主具, 11a 主前, 11b 主[形], 12b 主主/主具, 13a 主不, 13b 主不, 14a 主不, 14b 主不, 15a 主前, 15b
主前, 15c 主具, 16a 主, 16b 主/対, 17a 与, 17b 主

中国:1a 主 Vt 目 Vi, 1b 主 Vt 目 Vi, 1c 主 Vt 目 Vi, 2a 主目, 2b 主目, 2c 主目, 2d 主前/主目, 4b 主目, 3a 項無し目,
3c 主目, 4a 主 Vt 目, 3b 主目, 3d 主目, 5a 主目, 5b 主目, 5c 主目, 6a 主目, 6b 主目, 6c 主目, 7a 主目, 7b 主 Vt 目, 8a
主目, 8b 主目, 8c 主目, 9a 主目, 9b 主目, 10a [2文], 10b 主目, 18a 主目, 18b 主目 r 目 t, 19a 主目 r 目 t, 19b 主
目 r 目 t, 20 主目, 11a 主目, 11b 場所目, 12b 主目, 13a 主目, 13b 主目, 14a 主目, 14b 主目, 15a 主目, 15b 主目, 15c
主目, 16a 主 p, 16b 主 p, 17a 主 [形], 17b 主 [形]

朝鮮:1a 題対, 1b 題対, 1c 題対, 2a 題対, 2b 題対, 2c 題与, 2d 題与, 4b 題対, 3a 項無し主, 3c 項無し主, 4a 題対, 3b
題対, 3d 題対, 5a 題対, 5b 題対, 5c 題対, 6a 題対, 6b 題対, 6c 題対/題主, 7a 題対, 7b 題対, 8a 題対, 8b 題対/題
主, 8c 題対/題主, 9a 題対, 9b 題主, 10a 題与, 10b 題主/題対, 18a 題対, 18b 題対 t, 19a 題対 t 与 r, 19b 題対 t 与
r, 20 題与, 11a 題対, 11b 題対, 12b 題主, 13a 題対, 13b 題対, 14a [副], 14b [副+不可能], 15a 主与, 15b 主対, 15c
主対, 16a 題(主 p), 16b 題(主 p), 17a 題項無し, 17b 題主

ゴフ:1a 主亜, 1b 主亜, 1c 主亜, 2a 主主, 2b 主与 w 具 p, 2c 主亜, 2d 主亜, 4b 主亜, 3a 主亜, 3c 主主, 4a 主主, 3b

主亜, 3d 主亜, 5a 主亜, 5b 主亜, 5c 主亜, 6a 主亜, 6b 主亜, 6c 主亜, 7a 主亜, 7b 主亜, 8a 主亜, 8b 主亜, 8c 主亜, 9a 主亜, 9b 主亜, 10a 主与, 10b 主亜, 18a 主与, 18b 主亜 t, 19a 主与亜 t, 19b 主与亜 t, 20 主亜, 11a 主亜, 11b [形], 12b 主補, 13a 主亜, 13b 主亜, 14a [副], 14b [形], 15a 主与, 15b 主亜, 15c 主亜/主処, 16a [自], 16b 主亜, 17a [形], 17b [形]

日本:1a 題対, 1b 題対, 1c 題対, 2a 題対, 2b 題対, 2c 題与, 2d 題与, 4b 題対, 3a 項無し主, 3c 項無し主, 4a 題対, 3b 題対, 3d 題対, 5a 題対, 5b 題対, 5c 題対, 6a 題対, 6b 題対, 6c 与主, 7a 題対, 7b 題対, 8a 題対, 8b 題主, 8c 題主, 9a 題主, 9b 与主, 10a 題与, 10b 題主, 18a 題主, 18b 題対 t, 19a 題対 t 与 r, 19b 題対 t 与 r, 20 題与, 11a 題与, 11b 題対, 12b 題与, 13a 題主, 13b 題項無し, 14a 題主, 14b 題主, 15a 題与, 15b 題対, 15c 題対, 16a 題 (対 p), 16b 題 (主 p), 17a 題項無し, 17b 項無し

題：主題，主：主語／主格，項無し：，t：theme，r：recipient，w：全体，p：体の部分，亜：亜抱合／複合体，[形]：形容詞述語，[副]：副詞による表現，処：処格，自：自動詞表現，目：(孤立型言語における動詞の後の) 格無し目的語，前：前置詞，不：不定詞，無：無語尾の不定対格，再：再帰人称，後：後置詞，CVB：副動詞，人：人称附属語，補：補文節，指：指定格，方：方向格，奪：奪格，PROP：所有，補：補語，沿：沿格，能：能格，絶：絶対格，斜：斜格，EZ:エザーフエ，関代：関係代名詞，動名：動名詞，